

「今日、ダイヤモンド見れるかもって」

GREEN SPRINGSの雑貨店で買い物をしている両親のもとへ、飲食店でバイト中のはずの康介が現れた。「仕事は」と父が聞くと、康介は「休憩時間、急いで」と返答もそこそこに店の外へ両親を連れ出した。

初めてのバイトを頑張っているか、我が子の姿を見に来た両親は、突然の展開に驚きながらも、人を避けながら康介を追いかけた。

まだまだ子供と思っていたのに、いきなり大人びた気がした。振り向きもせず進んでいく背中が頼もしいほどだ。

「間に合った」とスカイデッキに着くと康介は遠くを指差した。黒いシルエットとなった富士山の頂に、オレンジ色の太陽が座るところだった。その場集っていた人々の口から歓声が漏れた。

ダイヤモンド富士というのだと、陽が沈んだあとで康介は両親に伝えた。バイト先の先輩に教えてもらって、どうしても見せたくなったのだという。

「バイト代まだだから、俺からのプレゼント、これ」

康介の枕元にプレゼントが届かなくなって何年も経つ。バイトに戻っていく我が子を見送ったあと、「こっちがプレゼントをもらう立場になったんだな」と、ふたりは喜びをわかちあうように腕を組んだ。

## Precious Time with Parents

Message

---

---

---

---